

えと

毎日毎日、然らうて描けるものはない。
然る描く事が習慣になる事は只に陰である。
れに描いた。然る描かないのが習慣に
なるトが健全である。然る描く事は職業に
ない、下流である。考へるはただ時の
メガイアの一つである。考へる事は、人
が流しも持し、こゝろ職業である。考へない日
は一瞬たりとも一秒たりともない、考へてい
る事に気がない時がほとんどの場合、考へ
こゝろなやちこゝろいゝ時ほとんどの場合、考へてはな

日比野克彦

描っているのは自分の線の集まりである

ペタの面を筆で塗りつぶしても筆の毛

の一本一本のタッチが残っている。自分の

線を描きたいというのが大きな欲求であ

る。だからモチーフは何だろう、人間

に何が物だろうか風景だろうか、その

のがもっている形を借りて自分の線が通

ればいい。だからモチーフに数字が

何も考えないである形をもった線を

描きたい時、数字は便利である。1 2

3 4

江苏工业学院图书馆
藏书章

に埋め、まるで入れ墨師のように、

数字を紙に描きつけていく。421位で

いかな事をやり始めてしまったと思

う。違い。ここを筆で描く。目指すは最後の

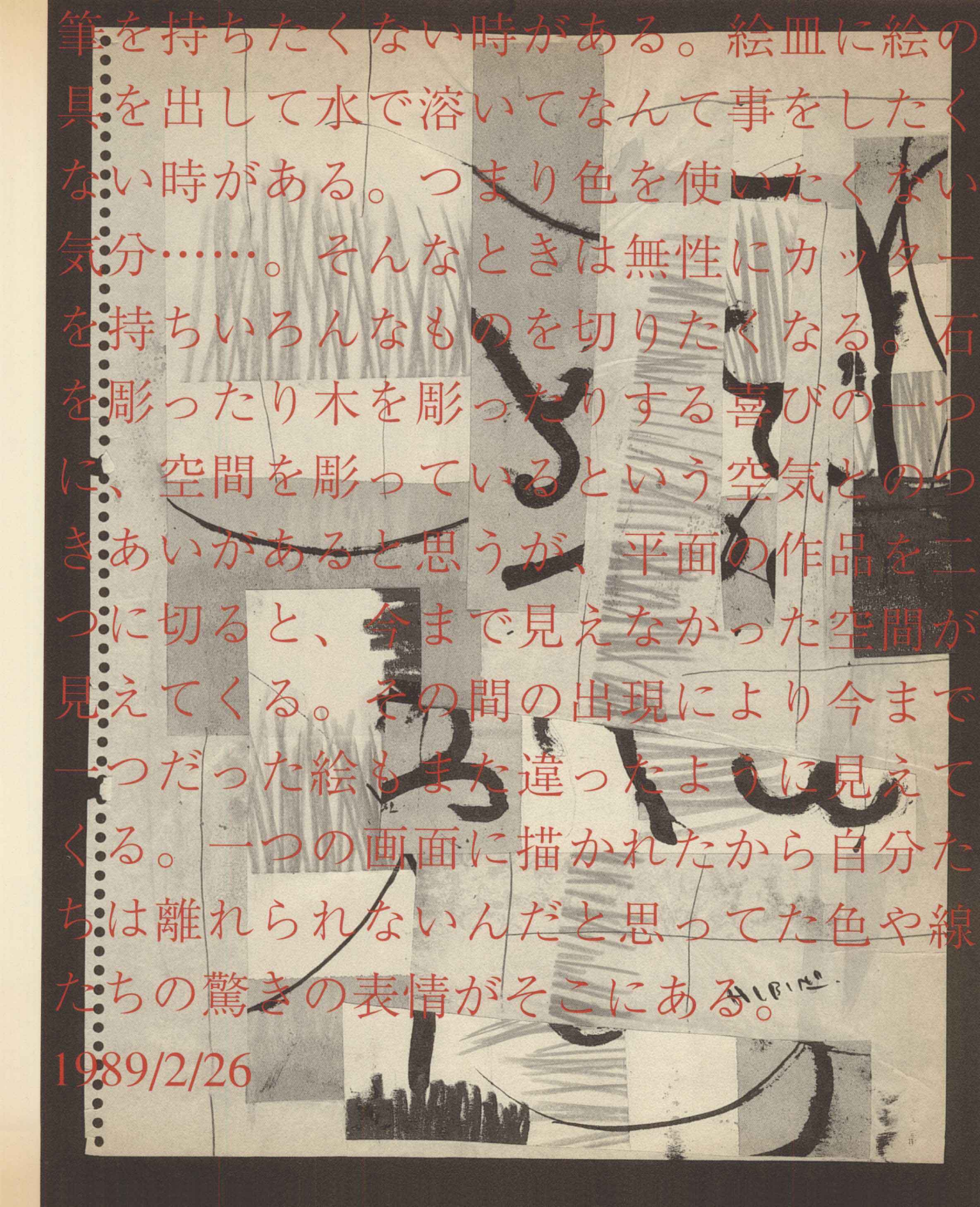
ひとマス。針灸痛になる位、自分の線を描

いてしまっ

1989/2/5

ものを作るとゴミがでる。ゴミを出そうとすると
ものができる。でるとできるじゃ意識が違う。意
識というより、言葉のパワーの出口が違うような
気がする。食事ができるとうんこがでる。運動が
できると汗がでる。深酒が~~でき~~るとゲロがでる。
サウナに長時間いることができると鼻血がでる。
日常の中で「でる。」事をしたい為に「できる。」
事をしている訳じゃないけれど、~~僕は~~どうも「で
きる。」ものたちより「でる。」ものたちの方に興
味がいく。日常のなかのほとんどが「できる。」
事柄のものたちが主役なのだが、この中のいくつ
かは「でる。」事柄のものたちが主役になれる時
があっても「できる。」ものたちは怒りはしないと
思う。「できる。」という意識のパワーより「で
る。」という無意識のパワー。記憶の力よりひら
めきの力の方が魅力がある。今の世の中、「でる」
パワーのほうが必要な事は^{たくさん}たくさんあると思う。

1989/2/19



筆を持ちたくない時がある。絵皿に絵の具を出して水で溶いてなんて事をしたくない時がある。つまり色を使いたくない気分……。そんなときは無性にカッターを持ちいろいろなものを切りたくなる。石を彫ったり木を彫ったりする喜びの一つに、空間を彫っているという空気とのつきあいがあると思うが、平面の作品を二つに切ると、今まで見えなかった空間が見えてくる。その間の出現により今まで一つだった絵もまた違ったように見えてくる。一つの画面に描かれたから自分たちは離れられないんだと思ってた色や線たちの驚きの表情がそこにある。

1989/2/26

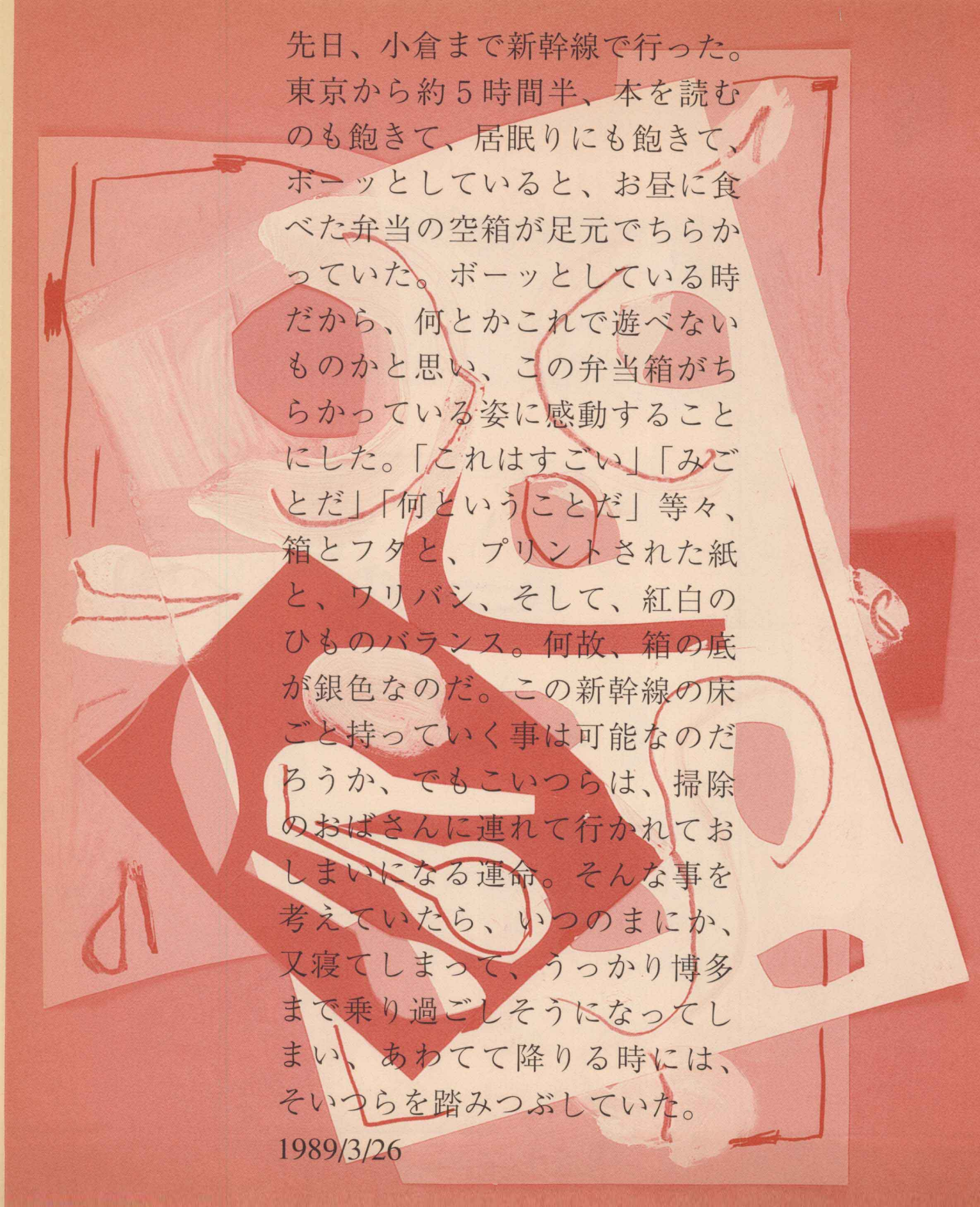
リンゴの皮をむく時に、途中で切れないように、一本に皮が繋がるように切ろうとするのは車を運転していて信号にひっからないようにイメージするのと同じである。道を歩いていて小石を蹴る、ずーっと蹴れる位置をキープしようとか、横断歩道を渡る時に、白い部分を踏まないで歩こうとか、どうでもいいことを決める事がある。赤い紙を切り抜いて白い地が出てくるようにしようと始めた作品だが、切り抜かれた赤い紙が一つにまだ繋がっていることに気がつく、切り離さない事に熱くなってくる。結果、最初はゴミになるはずだった方が作品になってしまった。ポジとネガを見較べてみてどっちがいいか、今回はポジで、次回はネガで行くか。表紙の絵の赤い部分を切り抜いてもらえば、ネガができますので、一緒に考えてください。

1989/3/5

1
8120
7989

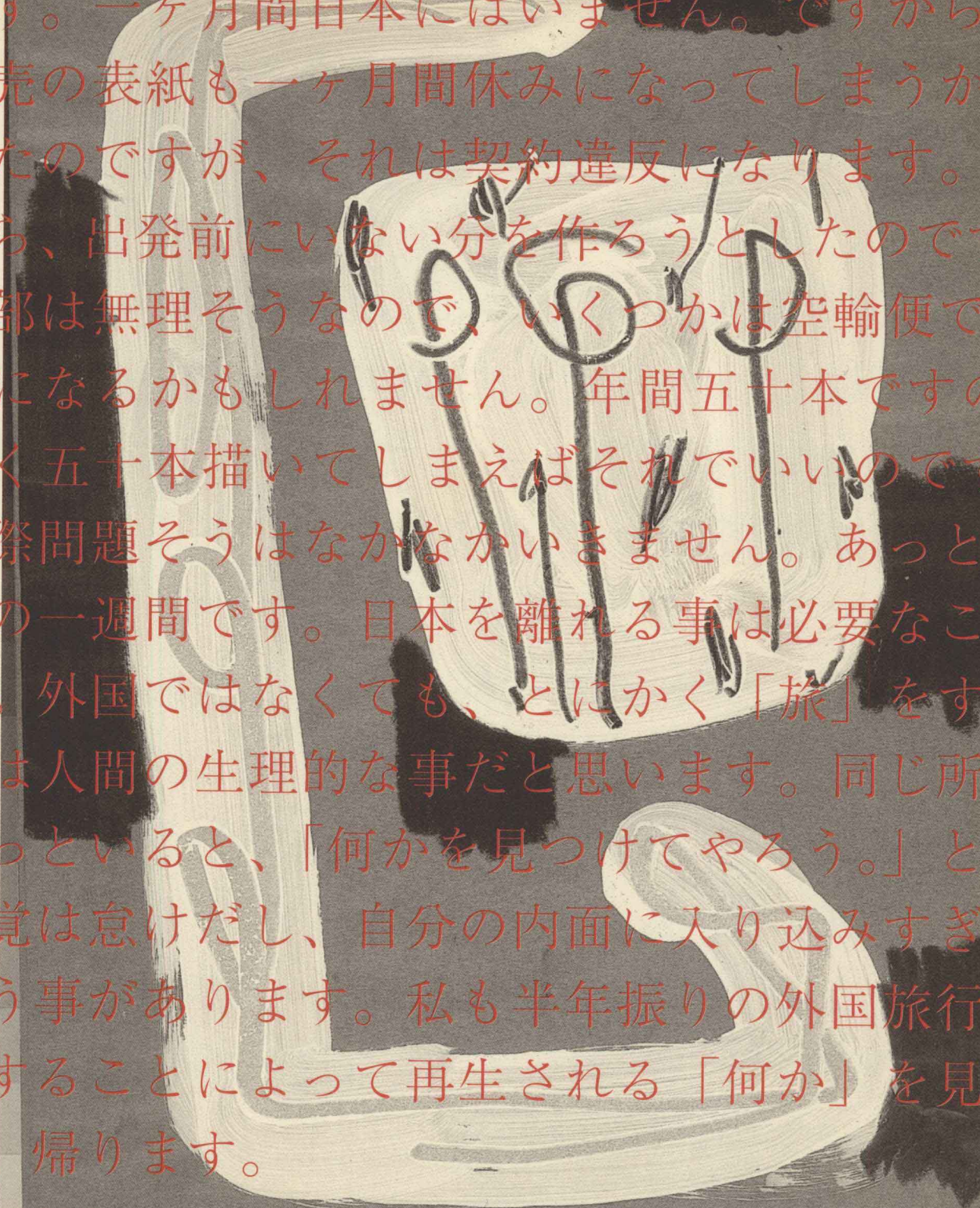
手を動かして何かを描いている時、ふと
手の位置がわからなくなる時がある。一
瞬手がねじれているような錯覚におちい
る。しばらくはその感触を楽しんで描き
続けようとするのだが、ヒジのあたりで
血なのか、神経なのか、はたまた全く違
うものなのかわからないが、そのねじれ
を戻そうとする力が加わる。感じてから
五秒もするとその力に我慢しきれなくな
り描く事をやめ、ヒジを伸ばし手を振る。
自分の手が今どの位置にあるのかという
事は目を閉じるとわからなくなる。それ
が視覚的に確認しているのに肉体的に理
解できない時がたまにある。

1989/3/19



先日、小倉まで新幹線で行った。
東京から約5時間半、本を読む
のも飽きて、居眠りにも飽きて、
ボーッとしていると、お昼に食
べた弁当の空箱が足元でちらか
っていた。ボーッとしている時
だから、何とかこれで遊べない
ものかと思い、この弁当箱がち
らかっている姿に感動すること
にした。「これはすごい」「みご
とだ」「何ということだ」等々、
箱とフタと、プリントされた紙
と、ワリバシ、そして、紅白の
ひものバランス。何故、箱の底
が銀色なのだ。この新幹線の床
ごと持っていく事は可能なのだ
ろうか、でもこいつらは、掃除
のおばさんに連れて行かれてお
しまいになる運命。そんな事を
考えていたら、いつのまにか、
又寝てしまって、うっかり博多
まで乗り過ごしそうになってし
まい、あわてて降りる時には、
そいつらを踏みつぶしていた。

1989/3/26



一週間ほど前から私はパリにいます。個展のためです。一ヶ月間日本にはいません。ですから週刊読売の表紙も一ヶ月間休みになってしまうかと思ったのですが、それは契約違反になります。ですから、出発前にいない分を作ろうとしたのですが、全部は無理そうなので、いくつかは空輸便で送る事になるかもしれません。年間五十本ですので、早く五十本描いてしまえばそれでいいのですが、実際問題そうはなかなかいきません。あっという間の一週間です。日本を離れる事は必要なことです。外国ではなくても、とにかく「旅」をすることは人間の生理的な事だと思います。同じ所にじーっとしていると、「何かを見つけてやろう。」という感覚は怠けだし、自分の内面に入り込みすぎてしまう事があります。私も半年振りの外国旅行、移動することによって再生される「何か」を見つけて、帰ります。

1989/4/2

成田を出発して十一時間後、モスクワに到着する。給油のため四十五分のトランジットである。目的地のパリまではあと三時間程である。ここ一年ぐらいでモスクワの空港は、整備されてきた。以前は暗くて、お土産屋さんも小さいのしかなく、一時間弱の時間をつぶすのには何もない所であった。今ではしっかりとしたDUTY FREE MARKETもでき、BARもでき、そして何と、日本料理屋もできる気配であった（障子とかがあるお店が工事中であった）。四十五分のモスクワ滞在をBARで過ごした。ウォッカ三杯、とても飲み易いウォッカでくいくいいってしまった。試しにビールを飲んでみたが、これがまずい。オレンジジュースも試したが、最悪。ビールとオレンジジュースが同じような味なのだ。やはりウォッカが一番安くてよい。四杯目と思ったが、時間切れであった。（パリにて）

1989/4/9



やるのは五回目である。そのうちの三日のうちの二日の近くのギャラリーである。六年程前にオープンしたところでもと肉屋さんだったスペースらしく、三つある部屋のうちタイルの壁の部屋は二つある。ここの出会いは日本にこのギャラリーのディレクターが来た時、通訳に入った人が私の画集を持っていたのがきっかけである。86年にシドニービエンナーレに出品したきっかけも、五日間しかやっていなかったヒビーンシアターというパフォーマンスの時にシドニーのキュレーターが二日間だけ来日し通りかかって見たというものであったし、どこでどうつながるかは妙なものである。何かいいことはないかなと受け身でいるだけでは物ごとの起こる可能性は少なく、やはり自分を発信している色々な人と出会うというのは楽しい事である。

1989/4/16



個展での作品はすべて現地で作る。今回のパリの
展覧会も日本からは画材すら持って行かず、すべ
でパリで仕入れたもので作る。画材屋に行って道
具を備えようとする「え、こんなものがあるの」
という発見もあるが、「げ、あれはないのか」と
いう事もあり、なければないで、違ったものがで
きる可能性がある訳だから、それもよしとする。
電話もかかってこなけりゃ、仕事の打合せもなく、
一日中作品の事だけを考えていればいい毎日であ
る。フランスは、三月二十六日の二十時五十九
分、十分後に二十七日の一時になった。冬時間か
ら夏時間への移行である。それに合わせたかのよ
うにめっきり暖かくなり、ものを考え、作るには
いい季節である。三月二十九日には、ルーブル美
術館も中央中庭に革命二百年を記念してできた透
明なピラミッドをメインエントランスとして再開
した。

1989/4/23

HIPINO

時間の使い方には色々ある。時間という奴はち
よっと甘い顔をすると土足でズンズン自分の中
に入り込んで、こちらが使われてしまうようにな
ってしまう。適当に時間とつき合っているのは、な
かなか難しい。空間（国、都市、仕事場）によ
って流れている時間の速度は違う。自分プラス
何人かの複数の人間が、どういう時間とのつき
合い方をしているかでその空間の時間の流れと
いうものはでき上がってくる。産業革命直後な
らいざ知らず、その流れというのは仕事の量で
決まるものではなく、人間の中にそれぞれもっ
ている時間の質で違ってくる。いつも同じ時間
の流れの中にいると、自分の体内時計を確認す
るのは難しい。かといって自分がいる空間の時
間の流れに逆らう事はもっと難しい。だから色
んな時間の使い方をしている人々のいる所へ行
った方がいい時間使い方だと思う。

1989/4/2

ものものの間には狭間がある。どんなに密着しているものもの間にも必ず狭間はある。

昔、中学Ⅱの頃、何の授業かは忘れたが、非常に驚いた話があり、今も時々思い出すのだが、十メートル先に逃げている人をめがけて弓矢をはなつ。弓矢は正確に逃げている人の背中めがけて飛んで行くのだが絶対にその人には当たらないというのだ。何故ならば、弓矢が十メートル飛ぶ時間の間には逃匿者は何センチか逃げる事ができる。弓矢がまたその何センチか飛ぶ時間の間には逃匿者は何ミリか逃げる事ができる。又その何ミリか弓矢が進む間に彼は何ミリミクロンか逃げる、又……。結局この繰り返しで絶対弓矢は彼に追いつかない。この話が妙に好きで、変な時に思い出す。この話は、ものものの間には必ず狭間がある、という話になっていて、何かの時に私をはっとさせてくれるのである。

1989/5/7.14

ALBINO

友人や先輩のアトリエを訪ねるのは楽しい。絵は知っているのだけれど、いったいどんな所で、どんな顔して描いているのだろうか。遊んでいる時の「のり」は知っているのだけれど、果して同じ「のり」で描いているのか、それとも別人の如くひょう変しているのだろうか。

今、某TV局の番組で、アトリエを訪問するというのがあって、私はこの、のぞき趣味を兼ねて何人かの作家のアトリエを見る事ができる。一度経験した場所というのは、いつでも想い出そうとすれば可能である。

今も自分がこうしている間に、みんなはそれぞれのアトリエで制作しているのかと思うと、ちょっとひやかしに覗いてみたくなる気がしてしまう。

みんながとなり組だとしぎやかだろろうと思うが、仕事にならないかもしれないですね。

1989/5/28

25年振りに神戸に来た。初めて神戸に来たのは、私が小学校1年生の時である。神戸タワーに登り、六甲のケーブルカーに乗った事は確かだが、これが生の記憶か、その時絵日記に書いたものを読み返してinputされたものかは定かではない。記憶の中の神戸は赤い神戸タワー（実はポートタワーというらしい）の絵が描いてある一枚の紙キレだけだ。ポートアイランドに向かう途中その絵日記のものと類似したものが現われた。「あっこれだ」、しかし思ったよりずっと小さい。ポートタワーの横に背の高いビルが建ってしまったのだ。これは確実に自分の記憶にはなかったのである。今、私は神戸の高層ホテルの窓辺にいる。自分が神戸の象徴としたポートタワーは、ビルに隠れて見えていない。25年目の今日、新たな神戸の象徴を私は見つけようとしている。

1989/6/4

海の中へ行ってきた。そこはまさに竜宮城であつた。一面サンゴのじゅうたんである。南の島の日射しが、サンゴの奥まで照らし出し、熱帯魚が踊りだす。

何千年とかけて自然が作り出したサンゴの大邸宅に住み、イタリアデザイン真青のテキスタイルを見事に着こなす熱帯魚たちの楽園は、瞬時にして自分が地上の生物だなんて事を忘れさせ、息をしなくてもずーっと海の中で暮らせるのではないかと錯覚させる。

いつもは海のベールに覆われて見えない宝石の山の中に、息をつくのも忘れ、吸い込まれていく。宇宙は見えても海の中は見えない。見えないものを認識するのは難しい。けど、海の中には確実に地球の宝があるのだ。

石垣島飛行場建設によるサンゴ破壊反対!!

1989/6/11

HIBINO

森の中へ行ってきた。青森県の白神山地のぶなの原生林へクマゲラ調査の為に、日本自然保護協会の人たちと道なき道の山歩きである。4時間程、ぶなの森を入って行くと、クマゲラの森がある。夕暮れ時になり、我々は山のように積もった枯れ葉の中に身を隠し、息をひそめ、クマゲラの帰りを待たせし、この冬を越したかどうかは定かでない。今、本州で確認されているクマゲラは、このぶなの原生林を守っているのだ。身動き一つせず、遠くから「クルクル」と、クマゲラの声がした。その声は、宇宙の彼方から、地中の奥深くからともいえる、神秘的な、通信であった。それからしばらくして「クーン。」という声と共に、真っ赤なベレー帽をかぶったクマゲラは姿を現わした。「生きていた!!」

1989/7/2